

# 唯識思想の成立について

——唯心から唯識へ——

舟 橋 尚 哉

## はじめに

私は先に「唯心と唯識」という小論文を発表し、そこで原始仏教以来、仏教思想の中で、いかに「心」特に「意識」が重要視されているか、そしてその伝統が唯識思想の「唯心と唯識」の思想においても、どのように受け継がれているかについて論じたが、しかし *citta-mātra* (唯心) という語は、すでに『十地經』(*Daśabhūmika-sūtra*) に説かれているが、*viñāpī-mātra* (唯識) という語は、瑜伽唯識派の論書においても、初めから説かれていたわけではない。<sup>②</sup>

最近の学界においても、*viñāpī-mātra* (唯識) が初めて説かれたのは『解深密經』の「分別瑜伽品」であろうというのが、ほぼ定説となっている。<sup>③</sup> 私も多分それでよいと思うが、もしそうであるならば、『瑜伽論』の中の *Srāvaka-bhūmi* (声聞地) や *Bodhisattva-bhūmi* (菩薩地) の方が『解深密經』の成立よりも、やや早いというの、学界で認められているところであるから、そうすれば『瑜伽論』の声聞地や菩薩地などは、瑜伽行派の論書ではあっても、*viñāpī-mātra* (唯識) はまだ説かれていないことになる。

私たちは唯識の論書といえ、当然そこには vijñapti-matra (唯識) は説かれていると考えがちなのであるが、厳密にいえば『解深密經』以前の瑜伽行派の論書には「唯識」(または唯心)の思想は説かれていても、vijñapti-matra (唯識) という語はまだ説かれていないことになる。

私はこのような vijñapti-matra (唯識) の成立過程を考察しながら、「初期唯識思想の形成と展開」<sup>⑤</sup>の問題の一端を検討してみようと思うのである。

## 一 唯心思想について

仏教においては、身・口・意の三業の内、特に意業を重視するように、「心」(citta)に重点がおかれている。このような考え方は仏教に共通するものであり、この伝統が唯心思想となり、さらには唯識思想の成立へと展開するものと思われる。

原始仏教においても、『法句經』(ダンマパダ)の「諸法は心に導かれ、心に統べられ、心に作らる。もし汚れたる心もて言いかつ行わば、それより苦しみの彼に随うこと、車輪の、これを挽ける者に随うが如し」(第一偈)とか、それと対応する「もし清き心もて言いかつ行わば、それより樂しみの彼に随うこと云々」(第二偈)の有名な偈は、如何に仏教が「心」というもの、「心の持ち方」を重要視するかを示すよい例であらう。

また大乘經典でも『維摩經』には、

「隨其心淨 則仏土淨」(大正一四・五三八c)

という、これまた有名な教説が説かれているが、この教説はすでに相応部經典にその源流が見出される。すなわち、相応部經典<sup>⑦</sup>には、

「比丘等よ、心の汚れの故に衆生は汚され、心の淨らかさの故に衆生は淨まる」<sup>⑧</sup>

と説かれているが、これに相当する雜阿含では、

「比丘。心悩故衆生悩。心淨故衆生淨」(大正二・六九。)

とあり、いずれにしても原始仏教以来、仏教においては「心」に重点がおかれ、「心の持ち方」が重要であることが説かれている。

このように仏教では当初より「心」に重点がおかれ、「心の持ち方」によって環境も変わって見えるという唯心的傾向が強い。中でもこの唯心思想が顕著に見られるのは『華嚴經』である。勿論、唯心思想は『華嚴經』や華嚴教學だけに見られるものではなく、龍樹の『大乗二十頌論』にも説かれているが、何と云っても『華嚴經』の十地品(すなわち『十地經』)は、おそらく三界唯心が初めて説かれた經典として、きわめて重要である。

もっとも、三界唯心を説く經典としては、『十地經』の他に『般舟三昧經』や『諸仏要集經』や『華手經』などがあるが、サンスクリット原典の存する『十地經』がその中でも最も有名である。

『十地經』では次の如く説かれている。

「彼(菩薩)は次の如く考える。この三界に属するものは、すべて唯だ心のみ(citta-mātra)である。如来によって區別して説かれた、これら十二有支なるものも、すべて一心(cacitta)に依るものである」<sup>⑫</sup>

と。ここでは十二有支の迷いの存在は一つの心の内に存在しているものであり、三界に属する、あらゆるものはすべて唯心(citta-mātra)であることが説かれているが、この教説は後に『唯識二十論』の初めにも、唯識(vijñapti-mātra)を設定する根拠として引用されており、きわめて重要な教説である。

この『十地經』で説かれた「三界唯心」の教説は、仏教が「心」を重要視する伝統の上に説かれたものであるが、この教説が後の「唯識」(vijñapti-mātra)の成立に大きな影響を与えたと思われるので、次にvijñapti-mātra(唯識)の成立の問題を考察してみようと思う。

## 二 初期唯識の経・論における「唯識」(vijñapti-mātra)の成立

vijñapti-mātra (唯識) が初めて説かれたのは『解深密経』であろうというのが、最近の学界でもほぼ定説となっている。<sup>⑭</sup>

そこで『解深密経』の「分別瑜伽品」を考察してみよう。

「世尊よ、毘鉢舍那 (vipaśyanā) を行う三摩地 (samādhi) の行境は影像 (bimba, pratibimba) でありますが、それは何ですか。かの心と異であるか、異でないかといえは、慈氏よ、異ではないといわれる。何故に異ではないのかといえは、かの影像は唯識 (vijñapti-mātra) であるからである。慈氏よ、識の所縁は唯識 (vijñapti-mātra) によって顕わされると私は説くのである」<sup>⑮</sup>

ここには vijñapti-mātra (唯識) に相当するチベット訳 rnam par rig pa tsam という語が二度も出ている。かくして『解深密経』に vijñapti-mātra が説かれているということは疑う余地がない。『解深密経』ではその直後でも次の如く説かれている。

「愚夫は顛倒の覚を有し、諸の影像において、まさに唯識 (vijñapti-mātra) であると、如実に知らずして顛倒に考える」<sup>⑯</sup>

またその直後には、

「三摩地 (samādhi) の行境は、かの影像において、これは唯識 (vijñapti-mātra) であると了解する。それ(唯識)を了解して真实性を作意するのである」<sup>⑰</sup>

と。ここにも vijñapti-mātra (唯識) という語が二個所に見出される。

ここは『解深密経』においてどういうところかといえは、「四種の所縁の境事」すなわち、

- (一) 有分別影像所縁の境事
- (二) 無分別影像所縁の境事
- (三) 事辺際所縁の境事
- (四) 所作成辨所縁の境事

が説かれ、その中で奢摩他 (śamatha) と毘鉢舍那 (vipaśyana) の所縁の境事に分けられるが、奢摩他の所縁の境事は  
 (二) 無分別の影像であり、毘鉢舍那の所縁の境事は (一) 有分別の影像であって、他の二(三) 事辺際と (四) 所作成辨  
 は俱所縁の境事であると説かれている。この中の毘鉢舍那の所縁の境事が有分別の影像であることを説くところで、  
 vijapti-mātra (唯識) が初めて説かれるのである。

いうまでもなく、ここの『解深密経』の所説は『瑜伽論』卷七十七に「如<sub>二</sub>解深密経中<sub>一</sub>」(大正三〇・七二三b)として、そっくりそのまま説かれている。というより、『瑜伽論』卷七十七は『解深密経』の分別瑜伽品第六と完全に一致するのである。

ただ『解深密経』は經典であるから、卷一の巻頭に「如是我聞」とあり、分別瑜伽品では「爾時」云々という形式で説かれている。従ってこの『解深密経』に相当する『瑜伽論』卷七十七には、当然、vijapti-mātra (唯識) は説かれていないが、残念ながらここに相当する箇所はサンスクリット断片がまだ見つかっていないから、『解深密経』と同じようにチベット訳に頼らざるをえない。

ところで『解深密経』で初めて vijapti-mātra (唯識) が説かれたであろうという根拠はどこにあるのかといえ、同じ『瑜伽論』卷二十六の声聞地においても「四種の所縁の境事」が説かれるが、この「遍満の所縁の境事」に四種ありとして、(一) 有分別影像、(二) 無分別影像、(三) 事辺際性、(四) 所作成辨が説かれている。これらは『解深密経』の「四種の所縁の境事」と内容的には全く同じものと考えられるが、『瑜伽論』卷二十六の声聞地では唯識 (vijapti-

mātra) という語が全く見あたらないことが有力な根拠となっている。

また『解深密經』ではそのすぐ後に、七種真如が説かれ、その第三了別真如のところで「唯是識性」<sup>⑮</sup>（大正六九九c）とあるが、『瑜伽論』声聞地にはない。このようなことが諸学者達によって、すでに解明されている。

また『解深密經』の中で、あまり指摘されていないようであるが、*viñapū-mātra*（唯識）が説かれている個所がもう一個所ある。そこでは漢訳でも「唯識」[相]（大正七〇一a）となっているように、チベット訳も *nam par rig pa tsaṃ* [*kyi mshan ma*]（影印北京版17—1—3—4）である。これなら「唯識」に相当する *sk. vijñapū-mātra* であつたと考えて間違ひなからう。

このように『解深密經』の「分別瑜伽品」において「唯識」(*viñapū-mātra*) が初めて用いられたということは、最近の学界ではほぼ定説となっているが、このことに関して一体誰が初めて気づき、学界において発表したのだろうかと思ひ少し調べて見た。（私の参考にした論文は、ほんの一部にすぎず、その他にもこのことに言及した論文があるかもしれないが、最近の論文から遡って、それより早く指摘した人へと考察してみようと思う。）

まず初めに高崎直道博士によって指摘されている、「唯識」(*viñapū-mātra*) の創始者をめぐって、『解深密經』の「分別瑜伽品」が注目されていることから考察しよう。

「この四種所縁の説は『瑜伽師地論』の「声聞地」にもある。そして『解深密經』はそれを手本としてこの章の構想を得たものと考えられるが、この両者における相違の最大の点は、「声聞地」には唯識ということが説かれていないことである。『解深密經』は(三)の「如所有性」を「七真如」とし、その第三に「了別真如」(了別唯識 *viñapū*) の名で唯識性を真理として掲げている」(講座・大乘仏教8、一九八二年二月刊)

ここでは『瑜伽論』の声聞地では説かれていない「唯識」(*viñapū-mātra*) が『解深密經』の「分別瑜伽品」では説かれていることが指摘されているが、博士は『解深密經』の「分別瑜伽品」が「唯識」ということを説いた最初で

あるとは断定していない。すなわち博士は次の如く述べている。

「唯識観の最初の創唱者を『解深密経』と断定できるかどうか、さきの引用中で、「我、識所縁唯識所現故」とあったのは気にかかる。ある経中でこの種の表現に出合うときは、多くの場合、先行の經典にその所説があったことを示すからである」<sup>②</sup>（講座・大乘仏教Ⅷ、一四頁―一五頁）

このように高崎博士は唯識観の最初の創唱者を『解深密経』であるという断定を避けながらも、現存の資料からは『解深密経』あたりが、「唯識」（*viñapti-mātra*）ということを最初に説いた現存の經典と考えておられるようである。それ以前にこのことに関連して書かれた論文を、発表年次の新しいものから古いものへと列挙するならば、小谷信千代氏が『大乘莊嚴經論』第19章（功德品）第50偈について<sup>③</sup>、『印度学仏教学研究』第29巻第1号一九八〇年二月刊）において、

『解深密経』の分別瑜伽品では、止観の所縁を『声聞地』と殆んど同じ仕方が説明しつつ、しかも影像をはつきりと *viñaptimātra* である、と言う。この点に関しては、分別瑜伽品の方が『声聞地』よりも後の成立であることを思わせる」（『印度学仏教学研究』第29巻第1号、四二〇頁―四一九頁参照）と述べ、小谷氏は『瑜伽論』の声聞地ではまだ説かれていない *viñaptimātra* が『解深密経』では説かれていることを指摘している。

それより前の論文としては、阿理生氏が「瑜伽行と唯識説」<sup>④</sup>（『日本仏教学会年報』第45号、一九八〇年三月刊）において、「唯識観の源流は解深密経（*Saṃdhirimocana-sūtra*）の分別瑜伽品（*byāṃsa pa* 弥勒章）に認められる。……この解深密経分別瑜伽品に説かれた止観の三昧は内容的に声聞の瑜伽行者の伝統的瑜伽行が基本になっていると考えられる。三昧の所縁として有分別影像や無分別影像について瑜伽師地論（*Yogacarabhūmi*）の本地分声聞地第二（『瑜伽処には次のような説明が見られる』（『瑜伽行と唯識説』七六頁）

とか、

「解深密經分別瑜伽品において止觀の三昧に関して唯識が説かれるに至ったのも、まさにそのような瑜伽行者の三昧のあり方を基盤的背景にして初めて可能であったと考えられる。唯識説成立の素地となるものが瑜伽師地論声聞地に見られるような瑜伽行者の瑜伽行のうちにすでに存在していたと言える」（『瑜伽行と唯識説』七九頁）とか述べている中に、唯識説成立の素地が『瑜伽論声聞地』にはあり、『解深密經』分別瑜伽品において初めて唯識(vijñapti-mātra)が説かれたことを暗に示している。

それより以前に『解深密經』「分別瑜伽品」において vijñapti-mātra (唯識) が初めて説かれたと明言している人は横山紘一氏である。彼は著書『唯識の哲学』（一九七九年七月刊）において、

「『唯識』のサンスクリットはヴィジュニャプティ・マートラ vijñapti-mātra である。この語が最初に用いられたのは『解深密經』「分別瑜伽品」の次の一文である」（五頁—六頁）

といて、「彼の影像是唯だ是れ識なるに由るが故なり」（六頁）の文をあげている。

また彼はその後で、

『『瑜伽論』卷第二十六には、それは真实性であり、真如であると説かれているが、いまだその内容が詳説されていない。ところが『解深密經』「分別瑜伽品」において、如所有性を真如にとらえ、それを七種にわけ、そのなかの第三の了別真如こそ「一切唯識」の真理であると明言するにいった」（一二頁）

と述べて、『瑜伽論』声聞地ではまだ詳説されていないが、『解深密經』「分別瑜伽品」になると、「了別真如として一切唯識性」が説かれていることを指摘している。

それ以前にこのことに関説した人は勝呂信静博士であろう。博士は『唯識説における真理概念』（『法華文化研究』第二号、一九七六年三月刊）において、



「唯識ないしは唯識性の語をはじめて用いたのは、恐らく解深密経分別瑜伽品であるが、……唯識(vijñapti-mātra)の語は、有分別影像なる観の実践のところに出自するのである」(三〇頁)と述べておられる。

このように私の知る限り、わが国では「vijñapti-mātra(唯識)を最初に説いたのは『解深密経』の「分別瑜伽品」である」と明言した人は横山紘一氏であり、「恐らく」といいながら指摘した人は勝呂博士であろうと思うが(それ以前に指摘した論文があったら教えて頂きたい。ただし『解深密経』を『瑜伽論』[の声聞地や菩薩地]以前の經典と考えていた頃の論文は除く)。それではそれ以前にこれらのことを指摘した人はいないだろうか。そこで私はシュミットハウゼン(Schmithausen)博士の論文に注目したいと思う。

シュミットハウゼン博士は<sup>②</sup>“On the Problem of the Relation of Spiritual Practice and Philosophical Theory in Buddhism”(German Scholars on India, Bombay 1976)に於いて『解深密経』は vijñapti-mātra を用いた最初のテキストと思われる」(二四一頁抄訳)と明言しておられる。

また博士はこの論文の中で、

『解深密経』は明らかに弥勒や無著に帰せられている作品より早いものである。それ(解深密経)は瑜伽師地論の完成したもの、最終的に編集されたものより以前に編集されていなければならない。しかしそれ(解深密経)は瑜伽師地論特に菩薩地や声聞地の大部分より発展した、より後の段階を明らかに示す多くの資料を含んでいる」(二四〇頁)

とも述べておられる。

それではこれらのことを一番早く指摘したものは、この論文といってよいのかというと、実はシュミットハウゼン博士は、それより三年前にこの論文をドイツ語で発表している。すなわち、

の論文で、先の英文の論文とはほぼ同じようなことを述べておられるので、おそらくこのドイツ語の論文が<sup>⑤</sup>一番最初にこれらのことを指摘したといえるであろう。

かくして *viñāpi-mātra* (唯識) を最初に説いた経・論は何かといえ、現存のもので考えるならば、『解深密経』(の「分別瑜伽品」)といっても、まず間違いないと思われる。

それでは次に初期唯識論書の上で、「唯心と唯識」がどのように用いられているかを考察してみようと思う。

### 三 初期唯識論書における「唯心と唯識」

弥勒の五部論の一つに数えられ、しかも梵・藏・漢の三本が揃っている『大乘莊嚴經論』において、*citta-mātra* (唯心) は偈頌並びに長行に見出されるが、*viñāpi-mātra* (唯識) は長行にのみ見出され、偈頌では用いられていない。<sup>⑥</sup> このことは何を意味するのであろうか。偈頌は弥勒または無著の作といわれ、長行は無著または世親の作といわれているから、偈頌が先に作られ、後に長行の部分が作られたと思われる。

そうすると、偈頌が作られた時代には *citta-mātra* という用法が一般的であって、まだ *viñāpi-mātra* という用法が成立していなかったか、あるいはまだ一般的に用いられていなかったのではないか、という推測が成り立つ。そのことは『大乘莊嚴經論』の求法品第三十四偈の偈頌と長行とを見ると、一層、この推測が当を得ているように思われてくる。すなわち、ここには、

「唯識 (*viñāpi-mātrata*) を求めるについての二偈、

『心は二として顕現する。貪等の顕現も信等の顕現も、その如くであるといわれる。それより他に染汚と善との

法はない』(第三十四偈)

二の顯現は唯心(citta-mātra)のみであるといわれる。所取の顯現と能取の顯現とである。Ⓢ

『心は種々に顯現し、種々の行相を生起する。顯現は有と無とである。しかしそれ故に、ここに諸法「の顯現」はない』(第三十五偈)

とあるが、長行の部分に「vijñaptimātrata(唯識)を求めるについて」といいながら、偈頌では「心の顯現」について述べ、第三十四偈の長行では citta-mātra(唯心)と説かれている。このことは偈頌では全く用いられていない vijñapti-mātra(唯識)が citta-mātra(唯心)と同じ内容であることを明かにしていると思われるが、ここで偈頌の「唯心」の内容を説くのに、長行では「唯識(vijñapti-mātrata)を求める偈」といつているところに注目したいと思う。

また『大乘莊嚴經論』では、同じく求法品の第四十七偈の長行並びに第四十八偈の長行でも vijñapti-mātra(唯識)が三、四回も用いられている。

「唯だ名のみ(nāmanātra)を見るとは、唯だ言説のみ(abhīlāpamātra)にして境を離れている。実に名のみを見るとは唯識(vijñapti-mātra)を「見る」」(第四十八偈の長行)

偈頌(第四十八偈)では nāmanātra(唯名)が説かれているにすぎないが、その長行ではまさしく vijñapti-mātra(唯識)が説かれている。

『大乘莊嚴經論』の真実品第七偈では、citta-mātra(唯心)が次の如く説かれている。

「また彼(菩薩)は境を意言にすぎないと知って、それ(境)に似現した唯心(citta-mātra)に安住する。そしてこの故に、二相(所取と能取)と離れた法界が現前に証せられる」(第七偈)

このように『大乘莊嚴經論』においては、偈頌の部分には citta-mātra(唯心)が説かれているのみで、長行に初

めて vijñapti-mātra (唯識) が説かれていることは、偈頌の成立と長行の成立との間に多少の時代的な差異があり、偈頌が作成された頃には vijñapti-mātra (唯識) という語は一般に用いられていなかったのではなからうか。(それとも『大乘莊嚴經論』の偈頌並びに長行が作られた時代には、vijñapti-mātra と citta-mātra とを、あまり区別せずに用いたのであろうか。)

このことは同じく弥勒の五部論の一つであり、梵・藏・漢の三本が揃っている『中辺分別論』の上でもいえることであり、私の知る限り弥勒に帰せられている『中辺分別論』の偈頌には vijñapti-mātra (唯識) は説かれていない<sup>②</sup>と思うが、横山紘一氏は「唯識の哲学」において、中辺分別論頌に vijñapti-mātra が用いられているように述べている。<sup>③</sup>

さて『中辺分別論』では次の如く説かれている。すなわち、第一章相品第六偈の長行において、

「唯識 (vijñapti-mātra) の了得に依って境の無所得が生ず、境の無所得に依って唯識 (vijñapti-mātra) の無所得生ず」<sup>④</sup>

と説かれているが、偈頌自体の中には vijñapti-mātra (唯識) の語はない。なぜなら、この第六偈では主語「唯識」が省略されているからである。

また第五章無上乘品では第二十六偈の長行において、

「実に唯識 (vijñapti-mātra) なりとの智のはたらくところは、境が無なりとの智がある。しかしこの境が無なりとの智は、それはまさに唯識 (vijñapti-mātra) なりとの智をも止滅させる」<sup>⑤</sup>

と説かれているが、偈頌の中に vijñapti-mātra (唯識) の語は見出されない。なお『中辺分別論』では、偈頌にも長行にも citta-mātra (唯心) という語は用いられていないようである。<sup>⑥</sup>

以上の如く、弥勒の五部論の一つである『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』では、いずれも弥勒に帰せられている

偈頌の中には vijñapti-mātra (唯識) という語は見出されない。ところで同じく弥勒に帰せられている『法法性分別論』ではどうであろうか、といえは、『法法性分別論』では世親の註釈の部分ばかりでなく、弥勒に帰せられる本文の中にも vijñapti-mātra (唯識) という語が見出される。

まず世親の註釈の上で考察してみよう。

「正加行への悟入は四種である。すなわち、(一) 得加行は唯識 (vijñapti-mātra) を了得する故に。(二) 不得加行は外境を了得しない故に、(三) 得不得加行は外境なきときは唯識 (vijñapti-mātra) も了得しない故に。表識の境なきときは、表識はありえないからである。(四) 不得得加行は「所取なる義と能取なる識との」二は実には二性として有らざる不可得によりて無二「平等」を知するが故なり」<sup>③</sup>

ここには vijñapti-mātra (唯識) という語が二回も用いられている。幸いにしてここはサンスクリット断片が存するので、このサンスクリットは vijñapti-mātra であることが確認できる。<sup>④</sup>

次に弥勒に帰せられている『法法性分別論』の本文の上でも、sk. vijñapti-mātra に相当するチベット訳 rnam par rig pa tsam が次の如く三回も説かれている。

「かくの如く得知するによりて唯識 (vijñapti-mātra) の得知に入る。唯識 (vijñapti-mātra) と得知するによりて一切の境の不得知に悟入する。一切の境の不得知により唯識 (vijñapti-mātra) の不得知に悟入する」<sup>⑤</sup>

これらの教説は『中辺分別論』相品第六偈の世親註並びに安慧釈の文章を想起せしめるものであるが、特に『法法性分別論』の本文に見出された後者の引用文は、弥勒の本文であるということに私は大変疑問を感じる。なぜなら、『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』の弥勒の偈頌の中には、vijñapti-mātra (唯識) という語は全く見出されなかったのに、ここには三回も vijñapti-mātra (唯識) という語が用いられているからである。

私は「唯識思想の成立」に関して、「唯心 (citta-mātra) から唯識 (vijñapti-mātra) へ」という展開の上に考察し

てきたが、このような立場から眺めるとき、*vināpiti-mātra*（唯識）を説いている『法法性分別論』の本文が弥勒の著作であることに大きな疑問が生ずる。勿論、『法法性分別論』を詳細に検討しなければ、最終的な結論は出ないが、弥勒の著作（瑜伽論の卷七十七、すなわち『解深密経』の分別瑜伽品で初めて *vināpiti-mātra* は説かれたといわれる）である『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』の偈頌の部分には全く説かれていない *vināpiti-mātra* が『法法性分別論』の本文には三回も説かれている不自然さを私は感ずる。（従って『法法性分別論』の本文を弥勒の著とすることには疑問がある。）

ところで最近、袴谷憲昭氏も『法法性分別論』の著者を弥勒とすることに別の立場から疑問を持っておられる。すなわち、

「チベットにおける仏教の前期伝播期には「マイトレーヤの五法」に関する伝承が全く存在しなかった」<sup>⑪</sup> といって、弥勒の五部論について疑念をいだき、更に別の論文では、

「マイトレーヤ（*Maitreya* 弥勒）に帰される『法法性分別論』の方は、その著者に関する伝承から推測されるほどには古いものではなく、後に展開した術語を自明のごとく前提とした上で述作されており」<sup>⑫</sup> といひ、そしてついに「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」（山口瑞鳳編『チベットの仏教と社会』昭61年）では、

「五法のうち、紛れもなく後代に作られたと思われるものは、『法法性分別論』のみである」（二五八頁）と述べている。

このように『法法性分別論』について、私は *vināpiti-mātra*（唯識）の成立という立場から疑念をいだき、袴谷憲昭氏は「弥勒の五部論のチベット伝承の問題」や、「無分別智と転依の結びつきの問題」<sup>⑬</sup> などから疑念をいだいてはいるが、『法法性分別論』が弥勒の著作であるということに疑いを持っていることには変わりがない。従って『法

法性分別論』については、著者問題を含め、その教義内容の解明など、再考の余地があると思う。

## ま と め

「唯識思想の成立」に関して、特に vijñapti-mātra (唯識) が最初に説かれたのはどの経・論であるか、またそのことを最初に指摘した人は誰か、ということを手がかりとして、「唯心思想から唯識思想への展開」の問題を考察してきたが、諸学者が指摘するように、『瑜伽論声聞地』の「四種の所縁の境事」と『解深密経』の「分別瑜伽品」を比較対照することにより、声聞地 (Śrāvaka-bhūmi) では説かれていなかった vijñapti-mātra (唯識) が『解深密経』の「分別瑜伽品」では説かれているから、この間に vijñapti-mātra は説かれるようになったと思われる。

更に『解深密経』の vijñapti-mātra (唯識) の説かれ方を見ると、高崎直道博士が「唯識ということの理論的説明は『解深密経』にはない。したがって、定中で唯識性を観ずると言っても唐突な感がないでもない」と指摘されているように、『瑜伽論』の声聞地の所説と切り離しては『解深密経』のここの所説の理解は明確にならないのではなからうか。

そう考えてくると、『解深密経』あたりで vijñapti-mātra (唯識) が初めて説かれたのではないかという諸学者の説にも納得がいくように思われる。勿論、これは現存の経・論からいえることであり、新しい資料が見つければそのときは修正を要するかもしれない。それから弥勒の著作といわれる『法法性分別論』であるが、これはどう考えてみても、もっと後期のものであろう。私はたまたま諸経論における vijñapti-mātra (唯識) の説かれ方を比較しているうちに疑問に思ったのであるが、もっと教理的な面でもいえるように思われるが、この点については最近、袴谷憲昭氏が検討しておられるようであり、この小論では予定枚数をすでに超えているので、今回はこれ位で筆を擱くことにしたい。

(平成元年四月脱稿)

註

① 仏教思想研究会編「仏教思想9『心』(一九八四年刊)」参照。

② 拙稿「唯心と唯識」(仏教思想9『心』所収)二二三頁参照。

③ 高崎直道博士「瑜伽行派の形成」(講座・大乘仏教8)一二頁—一五頁参照。

もっとも、高崎博士は「唯識觀の最初の創唱者を『解深密經』と断定できるかどうか」(一四頁)という疑問を持っておられる。

横山紘一氏「唯識の哲学」五頁—六頁参照。

④ 高崎博士「瑜伽行派の形成」三二頁—三三頁参照。

小谷信千代氏『大乘莊嚴經論』第19章(功德品)第50偈について」(『印度学仏教学研究』第29卷第1号)四一九頁参照。

⑤ このテーマは実は私の昭和63年度文部省科学研究費、一般研究Cの研究課題でもある。

⑥ 拙稿「唯心と唯識」(仏教思想9『心』所収)二二三頁参照。

⑦ 高峯了州博士「心の根本課題——主として阿含經典の中に——」(『仏教学研究』14・15、昭和32年、特集「仏教に於ける心の構造」)一頁参照。

桜部博士「唯心思想を盛った般舟三昧經の一節について」(大谷学報第六一巻第三号)六頁参照。

⑧ *Samyutta-Nikāya* III p. 151, l. 22, l. 31. 参照。

⑨ 玉城康四郎博士「唯心の追究——思想と体験との交渉——」(中村元編「華嚴思想」)三三五頁参照。

⑩ 拙稿「唯心と唯識」(仏教思想9『心』)二二九頁参照。

⑪ 赤沼教授、坂本幸男博士、桜部博士などの指摘がある。拙稿「唯心と唯識」(仏教思想9『心』)二二四頁—二二五頁参照。

⑫ *Daśabhūmika-sūtra* (近藤本) p. 98, l. 8. 参照。

竜山教授「梵文和訳十地經」二二二頁参照。

荒牧博士「大乘仏典8、十地經」一七六頁参照。

⑬ Lévi: *Vijñaptimātratāsiddhi* p. 3 参照。

ただし、この部分はチベット訳などからの還元梵語である。第一偈、第二偈の梵本は現存するが、その長行の部分の梵本は



まだ見つからない。

⑭ 本稿註③参照。

⑮ 北京版では「何故に異であるのか」(影印北京版13—5—8)とあるが、「何故に異ではないのか」(Lamotte: *Saṃdhimīmānāsūtra* p. 91, l. 2)の方がよいようであり、漢訳や前後の関係からも訂正するべきであろう。但しデルグ版 (27a, l. 4) もナルタン版 (2a, l. 4) も北京版と同じである。

⑯ 西藏大蔵経 (影印北京版) 29巻13—5—7参照。

⑰ 高崎博士「瑜伽行派の形成」(講座・大乘仏教8) 一二頁参照。

⑱ 西藏大蔵経 (影印北京版) 29巻14—1—6参照。

⑲ 西藏大蔵経 (影印北京版) 29巻14—2—3参照。

⑳ このチベット訳は *ram par rig pa nid* (影印北京版15—3—5) であるから、*vijñapti-mātra* とはいえないと思う。

㉑ 高崎博士「瑜伽行派の形成」(講座・大乘仏教8) 一三頁参照。

㉒ 横山紘一氏「唯識の哲学」一二頁参照。

㉓ 高崎博士「瑜伽行派の形成」(講座・大乘仏教8) 一三頁参照。

㉔ 高崎博士「瑜伽行派の形成」(講座・大乘仏教8) 一四頁—一五頁参照。

㉕ 当該の「印度学仏教学会」の大会は一九八〇年七月であるから、研究発表したのはこの時である。

㉖ 当該の「日本仏教学会」の大会は一九七九年六月であるから、研究発表したのは、この時である。

㉗ なおシュミットハウゼンは最近、次のような論文を発表しておられる。

“On the *Vijñaptimātra* Passage in *Saṃdhimīmānāsūtra* VIII 7” (インペリカル研究VI『神秘思想論集』一九八四年所収)

㉘ “*Spirituelle Praxis und Philosophische Theorie im Buddhismus*” pp. 168–169 参照。

㉙ このことについては、私も大分前から気づいており、論文(拙稿「唯心と唯識」・仏教思想9『心』二四二頁)の中で関説したこともあるが、シュミットハウゼン博士がすでに論文の中で「〔大乘莊嚴経論の〕*Mātreyaśāstra* は *cittamātra* を用いるが、*vijñaptimātra* は用いていない」(“On the Problem of the Relation of Spiritual Practice and Philosophical

Theory in Buddhism", 1976, p. 248) と指摘していることを最近知った。

②8 Lévi 本<sup>7</sup> p. 63, l. 16 参照。

拙稿「唯心と唯識」(仏教思想 9『心』二四二頁参照)。

②9 上の偈は Lévi 本<sup>7</sup> p. 63, l. 22. *viññāya* ……となっているが、これは偈頌の数え方が間違っている。Lévi 本<sup>7</sup> p. 63, l. 23. *cittam* ……以下が第三十五偈である。このことについては、拙稿「大乘莊嚴經論」(求法品)の原典再考並びに『唯識二十論』の第一偈、第二偈の原本について」(印度学仏教学研究第三十五巻第一号)二三頁参照。

③0 Lévi 本<sup>7</sup> p. 67, l. 6 参照。

③1 Lévi 本<sup>7</sup> p. 24, l. 1 参照。

③2 長尾博士の *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Tokyo, 1964) の Index I (Sanskrit-Tibetan-Chinese) p. 131. *viññāpti-mātra* は I, 6, V, 26 の二個所に出ており、いずれも偈頌ではなく、長行の部分である。

③3 横山紘一氏「唯識の哲学」に「弥勒は『中辺分別論頌』および『法法性分別』において *viññāptimātra* の語を初めて用いた(二三頁)とある。

③4 Nagao: *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Tokyo, 1964) p. 20, l. 3. 参照。

③5 Nagao: *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Tokyo, 1964) p. 72, l. 13. 参照。

③6 長尾博士の『中辺分別論』の Index I (Sanskrit-Tibetan-Chinese) 参照。

③7 *sk. vijñaptiyārtha* であるが、山口博士はチベット訳によつて「認識せらるべき境」(*viññāpaniyārtha*) と訳されている。

③8 山口益博士「弥勒造『法法性分別論管見』」(常盤博士仏教論叢) 五五〇頁参照。

チベット訳三四頁一八行目(『還暦記念 印度学仏教学論叢』所収) 参照。

③9 Appendix p. 48, l. 22, p. 49, l. 1 (『還暦記念 印度学仏教学論叢』所収) 参照。

④0 チベット訳一七頁七行目(『還暦記念 印度学仏教学論叢』所収) 参照。

この部分は世親の註釈にも引用されている。(チベット訳四〇頁一二行目参照)。

④1 袴谷憲昭氏「チベットにおける唯識思想研究の問題」(『東洋学術研究』第二十一巻第二号昭57年) 一四六頁参照。

④② 袴谷氏「唯識文献における無分別智」(駒沢大学仏教学部研究紀要)第43号、昭和60年)二二四頁参照。

④③ 袴谷氏「唯識文献における無分別智」(駒沢大学仏教学部研究紀要)第43号、昭和60年)二二四頁参照。

④④ 高崎博士「瑜伽行派の形成」(講座・大乘仏教8)一四頁参照。

(昭和63年度文部省科学研究費一般研究Cの成果の一部)

〔附記〕 この小論を書いているときに、勝呂信静博士の大著「初期唯識思想の研究」が出版された。六〇〇頁余の大著なので、

とても全篇を参照することはできないが、勝呂博士も『法法性分別論』は『瑜伽論』『撰大乘論』より後の作成であろう  
と思う(一八六頁)と指摘しておられる。